
ぼくは死んだ

今日源石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくは死んだ

【Nコード】

N8837V

【作者名】

今日源石

【あらすじ】

屋上のないマンション、心霊スポット、他人に見られてはいけない番号。そして「我々が出すお題と一致する人を殺せ。お題の答えが分かった人は各自部屋で報告をするかその人を殺せ。点数をつける。百点になったら解放だ。なお、お題の答えが出ない場合は、その人は各自つけている腕時計により死ぬ」という謎のマイク音が出る。その他ルールを教えられる。それらが交差する空間で記憶を失った住人たちが、ただマイク音を頼りにマンションの中で生存の歩みを進める。徐々に明かされる自分たちの記憶、マンションの

謎、
マイク音の正体。
生き残るのは誰か。

困惑

目を開けると白い部屋があった。

濡れてる？服か？寝汗か。

ここ何処だ？頭が重い。ズーンと来る。

心にかけていたことを彼は初めて言葉にした。

「んん？これは何だ」

‘ 71 ’と書かれた木のプレート。手のひらに収まる大きさだ。

「ナナジュウイチ。なんだこりゃ」

彼は、なぜここで寝ているか分からなかった。気付けば手首のあたりの腕時計が重く感じる。とにかく部屋を出る。

彼は足を妙に早める。廊下に出る。気分が悪い。

ドアを見ると、「安藤」の文字。

彼は、安藤という名前らしい。

廊下の端を見ようとした。行ってみた。

‘ 5 F ’の文字。

右側に階段があった。ここは五階だ。安藤は下から何か人らしきものがやってくる気配を感じた。小さな足音が徐々に大きくなり、緊張が走る。

男が歩いてやってくる。少し身を引く。

男に話しかけられ安藤は驚いた。

「よお、俺は一階にいる鈴木虎すずきとらっていうんだ。お前は？」

安藤は答えるのを少し戸惑った。鈴木の実剣な眼差しに負け、口を開く。

「僕は、ええっと、安藤真司あんどうしんじ。・・・ごめんなさい」

「なぜ謝る？俺も目が覚めた時には一瞬自分が誰だか分からなかったんだ。心配するな」

鈴木は驚いた顔をしていた。安藤は笑いを隠していた。自分に何が起こったかは分からない。ただ、この鈴木は陽気に受け止め自分

に話してくれる。それが嬉しくて笑った。

名前は憶えている感じた。あとは、まだ分からない。

「まあ気楽にいこうぜ」

鈴木はそんなことを言って安藤の肩をたたく。鈴木も安藤と同じ腕時計だと気づく。

その時、ぷつり、ザザザ……。この音は、マイクが入る音だ。

——只今より広場に集合いただきます。質問等は受け付けません。場所は、部屋にある地図を参考にしてください——

女の人の声だ。キャビンアテンダントの人のようだ。

鈴木がため息の後に静かに呟く。

「まったく。何なんだろうな。腕時計は外れないし、場所がどこだかわからない。部屋にあった番号も。そう思うだろ、安藤。番号の裏見たか？」

「い、いや。見てない」

「そうか。そこには、‘他の存在に知られるな’と書かれている」

「へえ、そうなんだ。ありがとう」

当たり前のことを普通にいう、素直な性格らしい。まあ悪くないと安藤は思った。

「それより広場に行こう。場所は、地下一階だ」

安藤は鈴木と一緒に行動することにした。

マイク音に誘われて

「それよりもさあ、ここ何処なんだろうな。屋上ないんだぜ」

鈴木の流れな口が安藤を攻める。

安藤はまだ来たばかりで、いや起きたばかりであまり話についていけない。

鈴木は続ける。

「それから箱あけた？ 恐ろしいよな。あつ、まだ開けていないならあと見ときな」

‘ 1 F / B 1 F ’ の文字が見える。

フロントらしきものはないのか。少しがっかりする安藤をよそに、鈴木が口を開ける。

「おい。見ろよ。着いたぞ」

自動ドアのガラスが鉄になったみたいだ。近づく自動ドアの様かと思ったら、手前にドアが動いた。

そこにはもう既に何人か来ていた。この様子だとあと十分はかかると思った。

急に鈴木が

「おい。見ろよ。あそこの姉さんたち」

そこにいたのは美しいでは形容し難い女性が立っていた。腕時計が同じなのをまた確認した。

鈴木が、

「あの、すいません。お名前は？」
と聞いた。

女性が答えた。

「はい。私は、ふじた藤田、みらい未来です」

聞くのもすごいが答えるのもすごいと安藤は思った。

安藤と鈴木が交互に自己紹介をした。

すると隣から、走ってくるのが見えた。また女性だった。

息をハアハア言わせながら、それが何かと言わせる雰囲気でした。

「未来、簡単に話をするなよ。まったくもう。あつ、あたしは山田^{やまだ}佳子^{よしこ}」

安藤が口を挿む。

「お二人は知り合いですか？」

「いいえ。あたしらは単に部屋が隣なだけ」

山田が即答する。

気付くと多くの人が広場に集まっていた。ざっと十倍くらいに増えていた。そこで初めてみんながこの状況に困惑しているのが分かった。

「おや？佳子ちゃん」

声をかけたのは中年男性だった。

「東海林君^{しょうじ}。遅かったね」

重ねて安藤は訊く。

「もしかしてお知り合いですか？」

「いいえ。部屋が隣なだけよ」

またか、と思った。

人は、倍に増えていた。

ちょうどその時に、マイク音が鳴る。

——全員お集まり頂きました。只今より、説明会を始めます。その前に、皆さんはもう死んでいます——

緊張が大きくなると同時に心拍も大きくなるのを感じた。

生きる為に

その場は一気に熱狂に変わった。

本当なのか、いやだよ、何なんだよ、誰だよ、といった声が續けざまに響く。

安藤は、静かにその場に立っていた。鈴木は、安藤に対して、興味を示した声で、何かを話していた。熱狂で全く聞こえなかった。

そこを止めるように、ピーというマイク音が鳴る。そして、監視しているかのごとく話し始めた。

——お静かにして下さい。監視下に置かれているのにあれこれ騒ぐのは愚かな人に他ありません。きつと、前世でも俗なこととしていたのでしょうか。しかし、皆様は運がいい。本当に幸運です——

笑っているのか分からない口調で話していた。その場にいる全員がその女の声に耳を傾けていた。また、嘲笑うように語った。

——亡くなったあなた方の肉体に再び戻るチャンスをここで与えようということです。ゆっくり聞いていただけると幸いです——

その場にはただ沈黙一つだった。息をのむ音一つに皆振り返るほど静かだった。

静寂を破る声。苛立ちを覚える感じを安藤は感じた。

——これから、始まることに關しての説明を聞いていただきます

——

そして、男の声に変わった。

——我々が出すお題と一致する人を殺せ。お題の答えが分かった人は各自部屋で報告をするかその人を殺せ。点数をつける。百点になったら解放だ。なお、お題の答えが出ない場合は、その人は各自つけている腕時計により死ぬ——

その瞬間に、鈴木が叫んだ。

「おい。まてよ、俺らは死んだんじゃないのかよ！」

山田もそれに續くように話した。

「そうよそうよ。何か変よ」

——今から説明する。それでいいか？——

またも沈黙が響く。しかし、そこには少しの興奮があった。

男の声が続く。

——順を追って説明する。

ここは、死者の集う所。死者の悩める靈魂が迷ってくる所である。ここで、生きて帰るためにあるゲームをしてもらう。さっき語った内容はゲームの大まかの内容である。

『お題と一致する人を殺す』とは、ただ単に問題を解くだけだ。例えば、千原さんがいて、 $10 \times 10 \times 10$ は千、つまり千に関連する千原さんがお題の答え、といった様にする。この問題の時間を「疑心暗鬼の間」と称する。

『答えが分かった場合は、報告するか殺せ』とは、言った通り各自の部屋のコンピュータを用いて報告をせよ。報告はメールで且つ一回のみとする。また、殺す時は各自部屋にある武器のみを用いて殺害せよ。また殺害する相手を間違えた時は、殺害者も死ぬ。

『点数をつける』とは、まず一人持ち点を五十点とする。そして「疑心暗鬼の間」において殺害した者は二十点獲得する。また、殺すのは駄目という方には報告という形をとる。報告は、先着十名のみで、早い人から順番に十点、九点、八点……とする。報告の時に失敗したときには点数を十点減らす。

『百点になったら解放』とは、そのままの意味で逆に零点になったら死ぬ。解放人数は十人である。

『お題の答えが出ない場合は、その人は各自つけている腕時計により死ぬ』とは、同じくそのままの意味である。何度も「死ぬ」という事を連ねているのは腕時計に内蔵している毒を注射することによって死ぬ。それは、我々が操作する。

疑心暗鬼の間は、その都度この放送によって開始する。

なお我々は常に監視している——

説明が終わった後は、興奮は冷め切って恐怖が支配していた。ま

た、放送が鳴った。

——追加説明を行う。

指示のないときは部屋の外での武器を使う事は禁ずる。使用者は死ぬ。なお、食時は配給する。

また、「一心不乱の間」を設ける。このゲームは、放送を行った後の各自部屋に食事を配給した時にボールが含まれていた場合、そのボールを配給された者は二十分間の間にこの広場にある投票場に入れよ。ただ、時間切れの場合はそのボールの配給された者は死ぬ。また、ボールの所持者には武器を用いて殺害してボールを奪ってもよい。ただ、ボールの所持者を間違えた場合は殺害者が死ぬ。

また、ボールの配給された者はしっかり運ぶことが出来たなら三十点を獲得する。ボールを時間内に運べなかった人は点数を二分の一に減らす。

なおボールの破壊は認める。

それでは解散。各自部屋に戻って良し——

マイク音の向こう側の不敵な笑みを安藤は感じた。

特待生

安藤は、一種の違和感を持った。ただ単に押さえつけられている感じがした。横から、鈴木が肩を叩いて話した。

「おい、安藤。おかしくねえか？疑心暗鬼の間での制限時間の設定や、目標とされた人間への今後の配慮がないと思わないか？一心不乱の間に対して手を抜いているとしか思わなかったな。後は、飯なんて 死んだ者にはいらねえんじゃないのか」

「そうだな」

安藤は苦虫をつぶしたような顔をした。それを見たかのように山田が話しかけてきた。

「ちよつと、鈴木さん。安藤さん困っているわよ」

「おっと、それはすまなかった」

鈴木が気を落ち着けた。

そこに乗っかるように東海林も安藤と鈴木の間に入ってまた口を挿む。

「まあ、気にしても仕方ないですよ」

藤田も山田と東海林の話を鼻で笑った。

安藤は自分の部屋に戻った。部屋の前には、「安藤」の名札が出されていた。その時に安藤は頭に残る内容——少し忘れたことでもまた復習すればさらに濃い記憶として残るという事——を思い出した。

安藤は、部屋に入った。ありきたりな白い部屋が目の前に広がっていた。少しベッドに腰を下ろすと、鈴木に言われた「箱を見たか」ということを思い出した。自分の目に偶然入った黒い箱にその気を起こさせられたと感じた。

安藤がその黒い箱を開けるとその中に入っていたのは、拳銃と紐だった。予想していた内容と似たり寄ったりだったと思った。「殺

せ」と言われたことがやはり頭から抜けない。そしてそのことを考えると何故か空腹を感じた。まだ環境に慣れていない為だと感じた。安藤は少し困惑した。食事を配給するとは言ってもどこから来るかが分からなかった。部屋を右往左往したが全く分からなかった。どうしたらよいか分からず、壁にもたれてしまった。その時に背中に少し違和感を認めた。それは紐だった。部屋があまりにも白かったので目視しにくかった。その紐は天井から垂れていた。安藤は気になってその紐を引っ張った。その時に、天井が空いて上から食事が落ちてきた。ただゆっくり落ちてきた。ワイヤーに吊られているのを認めた。

食事のプレートを見てみると封筒が入っていた。そこにはこのようには書かれていた。

特待生加入のお知らせ

注意…この封筒は、ゲーム参加者百人から無作為に選ばれた五人に配られるものです。

特待生とは…この空間の中で、もう一つのゲームに参加していただく代わりにある特権を与えるものです。

ゲーム：特待生同士を当ててもらいます。分かった場合はメールにて報告して下さい。当てられた人は、死亡します。失敗しても死ぬことはありませんが、最大五回までの送信のみとなります。

特権…この空間の秘密を発見した場合、メールにて報告して下さい。このゲームの参加権自体を消去します。そして、解放して生き返ることが出来る。

尚、このことは口外禁止。口外した場合、特待生は死亡します。この特待生の権利を有効利用していただけることを願います。

安藤は少しの安堵を感じた。このゲームの中の参加者が百人だという事、特待生として選ばれたことへの強運に喜びを持った。しかしそれは自分も殺される可能性が大いに上がったという事を示して

いた。

安藤は、急に恐怖を感じてベッドに入った。

安藤はいつの間にか眠っていて食事もさげられていた。天井から垂れている紐も消えていた。食事の時にのみ配給だと安藤は知った。

この部屋には、時計がないと改めて感じた。ただ、眠気は感じなかった。

安藤は主な疑心暗鬼の間以外に、一心不乱の間、特待生への当て合い・特権の試合を求められてしまった。

一心不乱の間

安藤はただ自分の置かれた状況に未だ困惑していた。鈴木が安藤の部屋に入っていることに全く気付かず、鈴木に頭を叩かれて安藤は鈴木の方を見た。ベッドの中に入ったまま眠れずにいたのだが鈴木は寝ていると勘違いした。鈴木は大きな声で叫んだ。

「おい、バカかお前。起きろよ」

安藤はうつ伏せの状態で掛布団を取られて急に悪寒がした。

大きな声で叫ばれたのに怒りを覚えた安藤は鈴木に向かって言った。

「何だよ。部屋に入る前にはノックしろよ」

「ノックしても何も反応無かったから扉に手をかけたら開いたんだ。鍵占めていねえのが悪いんだ」

鈴木ははつきり言ってさらに続けた。

「言っておくが俺以外の人間だったら殺されていたぞ」

安藤は言われた意味があまり分かっていなかった。それに気づいた鈴木が話を続けた。

「お前、あと五分後に一心不乱の間が始まるぞ。放送聞いてなかったのか？」

安藤は鈴木に言われて正気を取り戻した。そして、緊張が走った。鈴木が言うには、五分後に始まる一心不乱の間は食事の配給による方法と全く同じ形でやるという事だ。安藤は、それは説明していることを繰り返しているだけだと思った。

その時、食事の配給される場所から食事とボールが落ちてきた。そしてマイク音が鳴る。

——只今から一心不乱の間を開催します。武器の使用を認めます。制限時間は二十分。それでは、始めてください——

鈴木が安藤の肩を叩いて言った。

「そのボールを寄せ。あ、いやそれは悪い意味じゃなくて、説明

を聞いてくれ。この一心不乱の間は一番最初のボールの所持者は何もしなかったら死ぬ。しかし、その後に矛盾する内容があった。時間内に運べなかったら得点が二分の一になる、という部分だ。これは、新しい所持者に対するルールだったんだ。それから考えたんだけど、一心不乱の間に関係ないんだけどルールの内容からして部屋の中なら武器の使用は大丈夫という事だ」

鈴木 of 早口には相変わらず安藤は混乱していた。大きく息をして安藤も鈴木 of 肩を叩いて話した。

「まあ、落ち着いて。僕もその内容についてはその見解でいいと思います。わざわざそんなことをせずに、細かく説明すればいいと僕も思いました」

安藤は時計を見た。時計には、17..28、と表示されていた。残り時間だと思った。

安藤と鈴木は武器を持って部屋から出た。そしたら、藤田、山田、東海林が待っているように並んでいた。東海林の手にはボールが握られていた。その顔は意外と落ち着いていた。

藤田が声を張って言った。

「どうしよう、二人とも。私たち三人行動を取ることにしたんだけど、一緒に来る？」

「そうします」

鈴木は即答だった。安藤も続いて言った。

「お願いします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8837v/>

ぼくは死んだ

2012年1月13日21時54分発行